

Title	昭和四十三年度夏季見学旅行記
Sub Title	
Author	乙川, 博士(Otokawa, Hiroshi) 高坂, 愛子(Takasaka, Aiko) 大野, 操(Ono, Misao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1969
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.127(625)- 130(628)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

氏の見解にそつてできるだけその妥当性と問題点とを確かめたものである。

昭和四十三年夏季見学旅行記

恒例の史学科見学旅行は東北方面で七月一日より五日まで行われた。一行は国史専攻から河北展生、志水正司、鈴木公雄、西洋史専攻から鈴木泰平、東洋史専攻から江坂輝弥の各先生方と学生三十四名であつたが、見学旅行としてかなり充実したものであつた。

七月一日

上野駅七時四十分発「第一みちのく」に乗り、午後一時過ぎ仙台に到着、さつそくバスで小雨の中を最初の見学地陸奥国分寺跡に向つた。国分寺跡に向うバス内でこの旅行中はじめの二日間、仙台附近の史跡を案内して下さる東北大学の髙橋富雄先生が紹介された。髙橋先生の説明により、武蔵国分寺につぐ大きさであると見られている陸奥国分寺跡、八練権現造りの典型的な豪華さを見せる桃山造りの大崎八幡神社、その別当寺である竜宝寺に安置されている釈迦如来像を見学する。大崎八幡神社は現在漆のぬりかえ工事が行われており、斗拱間の墓股に彫られた彫刻や彩画は過去の華やかさを取りもどしつつあつた。竜宝寺釈迦如来像は京都嵯峨清涼寺の本尊と同形式で特徴ある彫刻である。

一日目の見学日程を終え第一の宿泊地仙台の旅館に着き、江坂先生の紹介により、希望者は東北大学の考古学研究室を見学する。

東北は考古学の宝庫といわれ、東北大学はその中心とあつて資料を整理する設備はかなり整つていた。この間、雨は降りやまず二日目の天候もあまり期待できなかった。

七月二日。八時半、小雨降る中を高崎廢寺跡に向けて出発。昨日と同様、髙橋富雄先生の説明を伺いながら、整備された廢寺址の伽藍配置を見学し、事務所で重弁蓮華文、重小文軒瓦の拓本などをを見せていただいた。次にその成立年代天平宝字六年に多少の疑問を含んでいる多賀城碑、そして陸奥の都とも言われる多賀城跡を見学する。多賀城は東北開拓の根拠地として奈良時代から南北朝に至るまで国衛・鎮守府・按察使の三種の官庁を兼ね備え、そのプランも実用的に配された朝堂院風のものであつた。あいにくの雨にもかかわらず髙橋先生の精力的な説明を伺いさらに正殿跡や土壘などを眼のあたりにして多賀城さらには柵城というものに対して認識を深めることができた。

午後からは志水先生に説明していただきながら松島周辺を見学した。まず伊達政宗創建の建物中最古の五大堂。これは単層宝形造本瓦葺で桃山時代の雄健な感じがよく出ており、またそれぞれ十二支の彫刻が施された墓股がおもしろい。次いで老杉に囲まれた瑞巖寺本堂は、乙字型の玄関を有し、上段の間、文王の間等善美を尽した各部室、彫刻、彩色等に、いかにも桃山時代の雄壮さと、当寺の格式の高さが感じられた。伊達光宗の露廟であつた円通院の内部には家形厨子が安置せられ、漆胡粉、金箔押金が精巧をきわめ、図案に切支丹文化が大胆に取り扱われている点、い

かにも海外貿易に関心を寄せた伊達家の面目躍如たるところが伺われた。最後に雨に煙った松島湾を一望に臨む観覧亭の背後に設けられた資料館で伊達家関係の道具類古文書古地図等を見せていただいた。

石巻の旅館に到着後、希望者二十数名は、江坂先生の引卒で右手に北上川を見ながら、石巻の郷土史家の毛利さんのお宅へ資料を見学に行く。主に考古学関係の資料で、縄文晩期の赤い彩色が施された土器等非常に興味深いものがいくつもあり、大変有益なひとときであった。

七月三日、今日も雨が降っている。八時半に旅館を出発し石巻の郷土史家楠本さんの古代人の漁業に關してのお話しを車中で伺いながら観音堂へ向う。ここには俗に立木観音と呼ばれる木彫十一年観音立像が安置されている。同所の鐘銘刻記によれば平安帝大同元年（八〇六）の作像となつてゐるが鎌倉時代初期の作と思われる。檜作り、内割彩色で高さは九尺八寸の男性的な表情をもつた像である。濡れてすべりやすくなつた坂道を下つてバスに乗り鮎川へ到着。船で金華山へ渡る。

金華山は牡鹿半島の東端、山鳥渡の水道をへだてた洋上に浮く標高四五〇m、周囲二四kmの島である。島全体が原始林でおおわれ、その間に純日本猿と神鹿が群れ遊んでいる。藤原秀衝がこの地に大金堂他二十一ヶ寺、十二坊、十三庵を寄進したと記録にあるが、いまは存在しない。今の建造物は大正末期に落成したものであるが、緑の樹木に囲まれて、社務所・宝物殿・神殿・拜殿・

祈禱所・隨身門・栖鳳閣などがならび、均整のとれた鹿のいるのを見ると、神域にいるのだという感を深くした。その気持をいだき、機橋に着くころ、ようやく晴れ間も見えてきて、一行は再び船に乗り金華山に別れをつげた。

石巻に戻り我々の宿のある一ノ関へ向う。途中、江坂先生の御意見で稲井町沼津貝塚を見学することとなつた。貝塚は水田地帯の細い道をずつと登つた所にあつて、この貝塚には土器や石器が表面に露出してゐた。多くの土器を拾ひ宿へ向う。バスの中では皆疲れてはいたが、歌をうたいながら、七時半、あたりが大部暗くなつたころ溪泉閣へ到着した。

七月四日。うつとうしい空もやつと晴れてさわやかな朝を迎えた。ゆうべは激しい音だけが聞こえていた嚴美溪も清冽な姿を見せた。

まず近くの山目永泉寺木造聖観立音像を見る。この仏像は樺材を用い丈五尺五寸五分、もとは彩色されていた。相貌は豊満のうちに重苦しい感じがあるが、半裸のすらりとした長身をもち幾分反り身に立たれる姿・腰から足にかけての女性的な流線に心ひかれる。こういうところが中尊寺系の諸仏と異なる点で、それらよりも古い様式である。

次は平泉中尊寺。月見坂を登り佐々木亮徳氏の説明で諸堂諸仏を見て歩く。寺伝によると仁明天皇の嘉祥年間に慈覚大師によつてひらかれ、清和天皇の貞観元年（八五九）に中尊寺の号を賜つた。しかしこの中尊寺で忘れてならないのはやはり藤原三代と

の関係である。初代清衡は前九年、後三年両役において戦死した敵味方の霊をなぐさめまたこの辺土に住む人々のために理想の楽土を実現しようという気持から七堂伽藍建立に着手した。さらに基衡は毛越寺を起し、秀衡は無量光院を造った。この三代の遺体は金色堂におさめられている。建立後八五〇年を経た金色堂は、このたび初めて解体修理がなされ、方三間単層宝形造り、木瓦葺で平安朝様式の代表的な格調を備え、文字通り金色さん然としていた。その他、経蔵・讚蔵・白山能楽堂・弁慶堂・美しく彩色された一字金輪仏（人肌観音）、一切経などを鑑賞し、東稻山と衣川を眺めて往時をしのんだ。

昼食をとり平泉文化史館で藤原三代の遺体学術調査の映画を見、毛越寺に向う。毛越寺の本堂には平安時代作の薬師如来像が安置されていた。他に常行堂・二階総門・鐘楼・経蔵などの建物がある。円隆寺跡は大泉池を前にして礎石を残し、芭蕉が行んで「二代の栄耀一睡のうちにして大門のかなたは一里こなたにあり」と感慨を述べた南大門も巨大な礎石だけで今は草地となり、美しいあやめが夕風に吹かれて咲いていた。

次に訪れたのは達谷の窟。そこに居を構えていた夷賊を坂上田村麿がしずめた際、京都の鞍馬寺に似せて九間四面の精舎をたて一〇八体の多聞天をまつり毘沙門堂と名付けられたそうである。ほかに不動堂と巨大な岩面石仏を見て、旅宿へ戻り、夜はコンパをひらき一同楽しく過ごした。

七月五日。水沢市佐倉河の胆次城跡を見学する。東は北上川に

北は胆次川に近接し、西は遙かに奥羽山系を望み、南は衣川にいたる水陸万頃の沃土に立地している。延暦二十一年（八〇二）坂上田村麿によつて築営されたもので、太宰府と著しい類似点がある。土師器、須恵器、古瓦など、また地積内に条里制らしきものが見られるため、天皇制古代国家政権が東北の辺境開拓に示した意図がうかがえる。ここでは江坂、鈴木（公）両先生の説明を受けた。

北上市民会館で昼食をとり、暑い日ざしの中を江坂先生の御説明で樺山ストーン・サークルを見る。西南へ傾斜する台地に径一メートル位の組石群が二十数個あり住居跡もある。縄文中期のものらしいが、ストーン・サークルが何のために作られたかはわかっていないという。

次に立花毘沙門堂。真白い収蔵庫に安置されている大小の毘沙門天と二天王・羅漢像を見学する。活動的な姿体と目を見開いた生き生きとした表情が面白かった。志水先生の説明では藤末鎌初ころのものとのことであった。

ここから盛岡までバスは国道を北上。河北先生と四年生舟越さんのお話を聞きながら盛岡市に入る。郷土史料館にて岩手県の物産・民芸品・考古学資料を見、原敬の茶屋であつた日芳庵、南部家庭園などを散策して、最後の見学をすませ、記念撮影をして午後四時、盛岡駅で今回の旅行は無事終わり解散した。

なお末筆ながら、今回の見学旅行に、種々御便宜を計られた、東北大学高橋富雄教授、芹沢長介助教授、中尊寺佐々木亮徳師、

北上市教育委員会各位に、御礼を申し上げる次第です。

乙川博士

高坂愛子 記

大野 操

莊 和子 「孝」についての史的考察

田村 静子 キリスト教受容のためのイエズス会学校内での教育方法について

藤村 東男 注口土器の研究
―特に大洞系注口土器の製作技術を中心として―

昭和四十三年度史学科卒業論文題目

国史専攻

藤巻 光世 平戸英国商館の東インド貿易史上の位置 ―リチャード・コックスの考えを中心に―

平松 瞳 キリスト教の社会活動の与えた影響 ―女性の社会的地位について―

井上 節子 高槻における高山右近

石田 誠吾 飛騨「梅村騒動」について
―明治維新との関連において―

磯部まさ子 水平社の創立について

見城真智子 明治社会主義思想家の一考察
―片山潜と「平民」時代―

榊野 玲子 自由民権運動における都市知識人の組織論

森本 敬子 中世大山崎油神人の活動

考察

野村真由美 徳川家光時代のキリシタン宗門の迫害についての一考察

佐々木香枝

中江兆民の自由民権思想とその実践

―第一議會への運動を中心として―

兼坂さくら 和算書を通してみた江戸初期の社会

河合 里美 杉本茂十郎と菱垣廻船積仲間

河村 幸子 領主的流通機構と株仲間

神尾 明子 石製模造品に関する一考察

大石美紀子 縄文時代の貝輪

置塩 康子 「老松堂日本行録」にあらわれた室町時代の瀬戸内海海賊の一考察

鈴木道之助 関東・甲信越地方の狩猟具の研究
―縄文文化前期末葉以後の石鏃を中心として―

浅越 史子 幕末における岡山藩の兵制改革と財政問題

蓮池貴代子 土佐藩刑罰に見られる幕府法の影響

平出 勲 近世における十日町織物の問屋制度と農村の展開

飯塚 輝子 幕末期洋学の性格に関する一考察
―諸藩における洋学採用を中心として―

岩垂 静子 江戸の下肥取引について
―その値下げ運動を中心に―